

第 62 回神奈川建築コンクール 住宅部門 審査総評

審査委員 古賀 紀江

本年度の住宅部門へは 51 の作品が寄せられ、書類選考の結果、一般住宅、長屋、共同住宅を含む 14 作品が現地審査に至った。現地審査の後、審査員による投票合議を経て最優秀賞 1 作品、優秀賞 9 作品、アピール賞として 2 作品が選定された。

最優秀作品の「THREE-FAMILY HOUSE」は設計者が育った場所に計画した 3 世帯用長屋である。既存住宅街に立地する長屋は、「繋がりデザイン」に満ちている。特に窓のレイアウトや大きさを変化させての「隣近所の緑との繋がりデザイン」、道路から住居内を抜ける視線を許容する「近所の人との視覚的な繋がりデザイン」等、外部との繋がりに関して秀逸である。繋がりデザインは「まち」との関係を醸成し、「この町」が持続するための建築的手がかりとも言えよう。加えて、室の繋がり強調のための梁をあらわしにする構造手段も鮮やかな、デザイン力溢れる作品である。既存住宅地での共同住宅の計画に新たな方向性を示すものとしても評価された。

次に優秀作品を紹介する。

「CLEANERS」は、ドライクリーニング店の店舗併用住宅である。都市部で法に則したドライクリーニング工場を実現するには、まちの人々の理解が必要不可欠である。仕事の実際を見せるための大きな出窓や街路から見通せる位置に配されたフリースペースとしても貸し出すチャノマは、人々の理解を得るために考え出された「かたち」である。この建物は、まちの人々の理解を得るための努力が結んだ像である。審査では施主と設計者が重ねた作品の結実に至るプロセスの意義も評価された。

「三浦の家」は、4 間×4 間の空間の中心に 1 間×1 間のコアを持つ。構造の要でもあるコアを中心にめぐるチューブ状のシンプルな可変性の高い空間は、暮らし方や時間の経過に柔軟に対応する可能性を構造面でも担保している。99.36 m²の本住宅の工事費は 2000 万円を切る。コアを核とした構造と空間構成、可変性、コストから一つのプロトタイプの誕生の芽が感じられた作品である。

「鎌倉の家(森と繋がる家)」は、職場が都内にある設計者が土地を求め、自分と家族のために考えた住まいである。隣接する公園の緑をプライベートに楽しむための 2 階リビングの大空間は SE 構法によるラーメン構造で実現した。家族が楽しむ場所が丁寧に作りこまれた美しい家である。首都圏にあって、優れた自然環境を有する神奈川県らしい事例の一つである。

大屋根が象徴的な「下永谷の家」は、代々続く旧家の建て替えである。本家の継承という意味を持つ建て替えでは、敷地内に積み重ねられた「土地の記憶」を継承することを求めら

れ、外構や庭園では保存のデザインが実行されている。この「土地の記憶の継承」は、地域という面的な広がり of 質を支える上で多くの示唆を含んでいる。

「鎌倉中央公園の住宅」は、遠く望む緑、身近で楽しむ緑という二つの距離感を体感できる空間と施主のイメージする豊かな生活場面を支える空間が巧みに融合した住まいである。それぞれの場所の居心地の良さは設計者のスケール決定のうまさを物語っている。

「日本基礎技術日吉寮」は、スケールダウンを狙っての15の分棟、中庭等のデザイン要素が効果的に作用して周辺の住宅街との乖離を防いでいる。この配慮は、あたかも街路の様な空間を生じさせ、各室の独立性を強調した個人を尊重した生活空間を生み出した。

「東林間の家」は、玄関の両開きの大開口に続く幅2730mmのワークスペースが内部を貫き、両側に室が配されている。近隣とイベントを開催することも考えたスペースの取り方は、町に対して我が家を開くための解の一つとも言える。

「キールハウス」は、無柱のワンルームを実現するためのキールトラス梁が建物の形態の核心となる住宅である。構造特性と傾斜地であることを利用した4層のらせん状の一つながりの空間には、住む人の多彩な場の様相が垣間見られた。

「地形の残像」は、親子二世帯の住まいの計画として分棟型を提案した。二世帯の関係を調整する空間として庭を位置付けている。住戸と庭を包括的に計画した好事例である。

今回のアピール賞は魅力的な景観に貢献する次の2作品である。

「港北0」は、外壁の下部に作られた1100mmの「抜け」を通して内部の人の動き、植栽を窺える形態である。地面から浮いた外壁が印象的な景観を町に提供している。「葉山の週末住宅」は、住戸内外の景色が際だって美しい別荘である。住宅地側からの景観に対しても行われた周到なデザイン努力が、やがて地域へも還元されることを期待する。

以上、本年度の入賞作品の総評である。